相馬街道（中村街道・二本松街道）の戊辰戦争

大　内　寛　隆

伊達市保原歴史文化資料館紀要 第１集 抜刷　平成26年３月

伊達市教育委員会

相馬街道（中村街道・二本松街道）の戊辰戦争

大　内　寛　隆

Ⅰ．はじめに

今回、図らずも伊達市保原歴史文化資料館紀要第１集に拙文を掲載させていただくことになった。

筆者の調査研究は、大学在学中の1957（昭和32）年に、筆者の郷里三春藩の藩政史からスタートした。以来、自治体史の近世を担当してきた。

戊辰戦争については、1981（昭和56）年の『国史談話会雑誌』第22号（豊田　武先生追悼号）に「戊辰戦争における三春藩の去就」を投稿したのが、最初である。その後、『近代福島と戦争』（歴春文庫）、『福島の学徒勤労動員の全て』を公刊した。そのため近代史が専門だと誤解する向きもある。しかし実は、1991（平成３）年７月に「霊山町史」の明治初期の担当者佐藤公彦桜の聖母高等学校教諭が急逝されたため、監修の小林清治福島大学名誉教授から急遽執筆を要請され、自治体史の近代を担当することになり、その成り行きでズルズルと近代をも担当することになった。しかし戊辰戦争を執筆したのは「伊達町史」「飯野町史」「月舘町史」「会津坂下町史」のみであるから筆者の研究歴はまだまだ浅いといわざるを得ない。

さて、前置きはこれ位にして、本題に入らなくてはならない。しかしここでは天下国家の政治的なイデオロギーなどを一々論じてその是非をあげつらうことをせず、この地域の1868（慶応４～明治元）年前後の情勢を実際に即して整理することにする。それというのもこの地域に領地を持つ大名たちにも領民にも数多の複雑で困難な事情があってとても義とか不義とかいう定規で二者択一に評価することができないからである。

なお戦争中の双方の呼び方は種々あるのだが、便宜上、官軍・西軍・征討軍を（新）政府軍、賊軍・東軍を（奥羽列藩あるいは奥羽越列藩）東軍または同盟軍と呼ぶことにする。

Ⅱ．幕末・維新期の諸藩

(Ⅰ)　この地域の領主たちと領地

陸奥国南部に位置する現在の福島県域には、親藩・譜代・外様の、会津藩を除けば、10万石以下の小藩が群居し、しかも他地域を本拠とするという大名・旗本もいた。さらにそれら諸藩の勝手向き（財政）はいずれも破綻し、洋式の軍備はおろか甲冑・具足、あるいは和銃さえも備えることが困難な状況であった。（表１）

(Ⅱ)　諸藩を取り巻く内外の情勢

上表でも分かるように、相馬中村・三春・二本松・会津の諸藩を除いた泉・湯長谷・磐城平・白河・棚倉・府中（石岡＝長沼）・守山（松川）・下手渡・黒石・梁川・越後高田などの藩は領地を分割され政治的にも財政的にも藩治の安定を欠いていた。その共通するところは、財政の破綻とそれによる軍制改革の停滞であろう。以下に各藩の事情を点検する。

１．湯長谷藩、藩主内藤政養（まさやす）

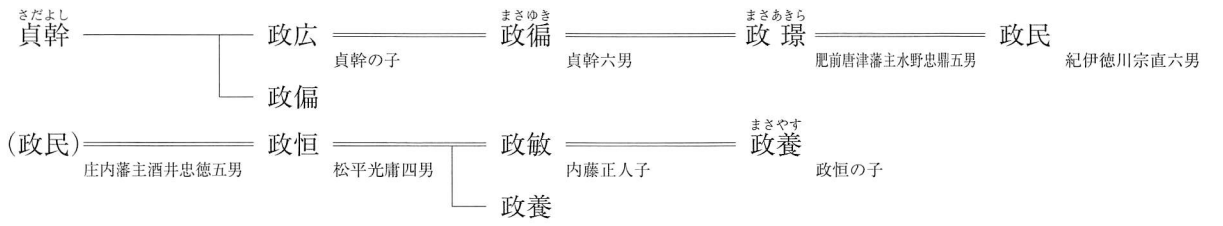
内藤家は、日向延岡内藤家（元磐城平藩主）の分家であるが、政偏から政養まで六代にわたって養嗣子をもって維持されてきた特異な家系である。小藩でかつ磐城泉本多・磐城平安藤に挟まれそれに随従せざるを得なかった。５月３日に奥羽列藩同盟に加わり交戦したが、泉、落城の翌６月29日に湯長谷も落城した。

表１　陸奥国南部の諸藩の拝領高、本領・分領、藩庁・陣屋の所在地一覧

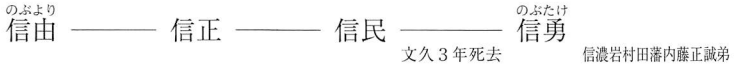
藩　名	領知	本　　領	分　領(1)	分　領(2)	分　領(3)	
守　山	2.0	田村郡16か村　7,908石 藩庁：田村郡守山	常陸茨城・行方・鹿島郡 12,000石			1870(M3)　藩庁：常陸茨城郡松川（大洗）に移す。
棚　倉	10.0 (12.1) ↓（？） 4万石削封	白川・岩瀬・石川郡92か村 62,000石	信夫・伊達郡17か村 20,520石	遠江豊田・他３郡40か村・信濃伊那郡・播磨加東郡 30,000石	出羽村山郡12か村 8,500石	
府　中 (長沼陣屋)	2.0 (3.0)	常陸新治（府中）・行方・茨城郡の19か村。 藩庁：常陸府中（石岡） 10,000石（14,000石）	岩瀬郡長沼・下・大久保・岩渕・大桑原・山寺・滑川・仁井田・袋田・矢沢・畑田・深渡戸・吉兵衛新田・成田・町守屋・滝・江花・勢至堂の18か村 10,000石（15,912石）			1869(M2)　石岡藩と改称
白　河	10.0 (12.1) ↓ 6.0 (82520)	白川・岩瀬・石川郡92か村 62,000石	信夫郡上飯坂・下飯坂か村 伊達郡泉原・掛田・大石・山戸田・瀬成田・下保原・中村・町市柳・二井田・柳田・上保原・所沢・布川・下糠田・上郡17か村　20,520石	遠江豊田・山名・麁玉・引佐郡40か村 10,581石 信濃伊那郡45か村 14,039石 播磨加東郡12か村 5,849石	出羽村山郡12か村 8,549石	1865(K1).10　老中罷免、４万石削封。 1866(K2).6　棚倉移封。
(横田)	0.5 (0.55)	岩瀬郡６か村				越後新発田藩溝口氏分知旗本
笠　間	8.0	常陸茨城・真壁郡　50,000石	陸奥磐前・磐崎・田村郡（神谷陣屋）　30,000石			
磐城平	5.0 ↓ 3.0	磐崎・磐前・菊多郡 25,900石	美濃羽栗・席田・土岐・可児・多芸郡　30,800石 減封20,000石が不明。			1868(M1)　陸奥磐井郡3.4万石へ転封（中止）
湯長谷	1.5 ↓ 1.4	磐前・菊多郡27か村＋□か村 13,000石	丹波氷上（ひかみ）・何鹿（いかるが）郡３か村 2,000石			
泉	2.0 ↓ 1.8	菊多郡34か村　15,000石	武蔵埼玉郡８か村　3,500石 上野瀬多郡９か村　2,000石			
下手渡	1.0 (込高)	伊達郡10か村　10,000石 ↓ 伊達郡６か村　7,000石	筑後三池郡５か村 5,071石			1868(M1).9　三池藩と改称
黒　石	1.0	陸奥津軽郡50か村 11,192.611石	伊達秋山村１か村 369.4639石			
松　前	3.0 (40358)	伊達郡梁川・大門・和泉沢・東大枝・西大久保６か村 9,717石	出羽村山郡東根	渡島福島・津軽・桧山・爾志郡	預地：出羽村山郡尾花沢 10,000石	1869(M2).6　舘藩と改称。 1870(M3).10.2　掛田・山野川・大石・泉原・瀬成田・牛坂・飯田・石田・山戸田が舘藩領となる。
福　島	3.0	信夫郡福島・曾根田・越浜・五十辺・小山荒井・御山・森合・八木田・方木田・郷野目・太平寺・金沢・永井川・伏拝・黒岩・大蔵寺・鳥谷野17か村。伊達郡渡利・山口２か村　16,757石	上総山辺郡３か村 2,928石	三河幡豆郡１か村、碧海軍重原村を含む18か村　10,469石		1869(M2).1　大沼郡 28,000石 →1869(M2).6　三河幡豆・碧海・加茂・設楽郡 17,754石 →重原藩と改称。
刈　谷	3.0	三河碧海郡　18,300石	伊達郡大波・平沢・成田・板谷内・塩野目・下群・湯野郡・増田・大立目・岡・塚原・伏黒・富沢・下小国の14か村　11,700石			
足　守	3.0 (2.5)	備中賀陽・上房郡　18,709石	信夫郡瀬上・丸子・本内・宮代・高梨・沖中野・平田・入江野・北沢又・南矢野目・北矢野目11か村 内高11,145石			1870(M3).11　伊達郡領を備中都宇・窪屋郡内に移す。
越後高田	15.0	越後頚城　120,000石	陸奥石川郡（浅川陣屋） 30,000石			

【典拠】『藩史大事典』各巻。『福島県史』８、９、10（上）、10（下）。『長沼町史』１．『月舘町史』１．『ふくしまの歴史』３．『国史大辞典』（吉川弘文館）各巻。『旧高旧領取調帳』東北編（日本史料選書）。

【補注】諸書を閲覧、検索すると、それが概説・通史の類であろうと、資料編であろうと、一に基本資料、例えば、拝領高に関する資料（朱印状や領知目録）の遺存状況、二に編集者あるいは執筆者の力量、三に本藩か分領かとか、そして四に拝領高が本田のみかあるいは新田込み高なのか、そして新田や改め出し高も加えた草高（実高）なのか、さらには概数記載や個別村高の集計といったことが未整理のまま収載または記述されているため、上表に記載された数字には異同もあり、また不明のところもある。例えば、『国史大辞典』７－P165.に「下手渡藩」では丸井佳壽子氏が「一万石（込高）、初め伊達郡10か村、……」と記述しているが、同書13－P258.には「三池藩」において半田隆夫氏が「陸奥国（福島県）下手渡に旗本五千石」（実高九千九百九十八石余）で、遷封され」と記述し、大きな誤りを犯している。



2．磐城平藩、藩主安藤信勇（のぶたけ）（信濃岩村田藩主内藤正誠（まさあきら）弟、六代藩主信民の養嗣子）



前藩主信正は桜田門外の変後の幕政を担当し、公武合体策によって和宮の降嫁を進めたため、坂下門外の変に遭遇して２万石の減知を受けたが、幕府と会津藩の擁護の立場をとって奥羽列藩同盟に参加した。養嗣子信勇の生家は信濃岩村田藩内藤家で、東山道先鋒軍に参加し越後口の戦争に参加した。泉藩主本多忠純らに続いて湯長谷藩主内藤長寿丸らも平城に入ったが、７月13日、平城も落ちた。磐井郡34,000石へ減転封を命じられるも藩主信勇の嘆願により中止となる。

3．笠間藩 ── 藩主牧野貞直（さだなお）

吉田松陰や高杉晋作が来遊するなど尊王攘夷論がかなり浸透し、貞直は大坂城代勤番中の1868（慶応４）年１月、大坂を脱出し、藩内の幕府擁護に呼応する者を検束し、奥羽追討総督府の命により小山へ出兵した。さらに９月28日には奥州へも出兵した。

4．棚倉藩 ── 藩主阿部正静（まさきよ）

正外は外国奉行、寺社奉行から老中につくが、1865（慶応元）年に、開港延期中の兵庫港の無勅許開港を主張して老中を罷免され、翌1866（慶応２）年に隠居を命じられ、嫡子正静が封を継ぎ（６万石に減知とも言われているが、確認できない）、棚倉に転封された。棚倉の松井松平康英（老中）は武蔵川越に加転封となる。川越の越前松平直克は前橋に転封され、三方替えは失敗し白河は城主不在となる（1868（慶応４）年２月、再度白河移封を命じられるも３月に棚倉へ戻る）。

将軍家の混乱、幕府人事の混乱の中、５月３日には、奥羽列藩同盟に加わり、政府軍の集中攻撃を受けて６月24日、棚倉は落城し、正備・正外・正静らは保原陣屋に脱出し９月18日に政府軍に降伏した。

5．常陸府中藩（→石岡藩）［長沼陣屋］、藩主松平頼縄

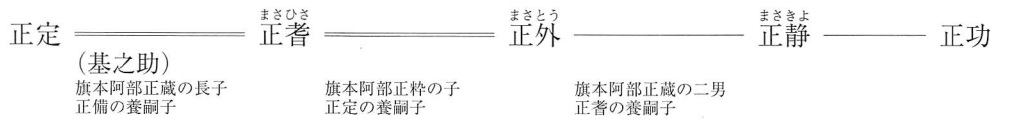
水戸徳川家御連枝＝藩祖頼隆は光圀の弟。定府。重臣は水戸徳川家より派遣される。

◆政治思想的風土

水戸・府中における水戸学（弘道館）や尊王攘夷運動の影響を受け、鎮派（市川派・保守派・穏健派・諸生党）と改革派（藤田派・天狗党・桜田門外の変・坂下門外の変・天狗党の乱＝常野戦争）との党争に巻き込まれ、長沼分領には諏方南宮の大祝人（おおほりぴと）安藤長門守（字重喬（あざなしげたか））のように平田篤胤の気吹之舎に入門するものもあって国学が浸透していた。常野戦争には出兵しなかったが、城下が戦火にさらされた。

◆戊辰戦争

３月25日には長沼陣屋が会津藩兵によって接収された。５月15日に彰義隊が政府軍に破れ上野戦争が終ると府中藩は政府軍に帰順し出兵しなかったが、会義隊が長沼撤収後の９月５日に府



中藩銃隊60人が長沼に出兵し９月７日には府中藩兵は政府軍の二本松本陣において岡山藩の人馬兵糧の賄いを命じられる。

６．守山藩 ── 藩主松平頼升

頼升 ═══ 頼之
水戸・徳川斉昭の廿二麿昭隣、将軍徳川慶喜の弟、頼升の養嗣子

1843（天保14）年には、鹿島郡荒野村に海防陣屋を設け大砲を配備し、1845（弘化２）年水戸藩主慶篤の政治補佐となるなど本家水戸徳川斉昭の感化を受けた尊王攘夷主義で、藩内にも天狗党に同調する者があって、1865（慶応１）年には、藩内から天狗党の乱関係処罰者を多数出した（処刑５人・謹慎18人）。1868（慶応４）年２月会津追討令を受けるも、翌３月に藩主頼升は江戸藩邸から大洗の松川陣屋に移る。翌４月の水戸弘道館の戦いを経て、藩領御代田村の神官遠藤無位・奥守らが護衛隊結成の動きの中、三春藩帰順の翌７月27日に西軍に降伏・帰順する。

７．三春藩、藩主秋田万之助（のち映季）、補佐伯父秋田主税季春

◇三春藩の領地 ── 分領などなく田村郡内にまとまっている。

◇秋田家の系譜と精神的風土……次の①、②が怨念のように三春藩秋田家主従に連綿と書き継がれ語り継がれ戊辰戦争における三春藩の動きを決定つけていたであろう。

① 豊臣秀吉により領知５万石と三ケ一代官所を任され、多くの鉱山も領有し、ほとんど旧領をカバーした。

② 関ケ原の戦いの時に、最上義光と戦火を交えたとされた。

抗弁し家康の面前で秋田実季は義光と対論することになっていたが、家康は狩に出、義光は家康に従って姿を見せず、重臣を出席させ、屈辱的な扱いをされ、常陸宍戸５万石に転封された。実季は幕府の公役を嫡子俊季に勤めさせ自身は出仕しなかった。ために幕府は実季を伊勢朝熊の永松庵に蟄居させ嫡子俊季に５万石を継がせた。

③ 実季夫人細川氏との縁から俊季は三代将軍徳川家光と再従兄弟の関係にあって（崇源院殿御由緒）、三春55,000石に加転封された。三春転封は重臣秋田四郎兵衛の考えによるとされるが、実季の思惑（若狭小浜、「羽賀寺文書」中「羽賀寺来雄あて実季書状」に「そのころ、丹波の国の福知山※やここかしこへ国替えになるとの噂が流れていました。そのことについては工作したことであります。」とある。）とは異なった。実季は、福知山など上方への転封を工作したが、実現しなかったというのである。

※当時、稲葉淡路守紀通45,700石。三春転封の直後の1848（慶安元）年８月21日、藩主紀通が自殺し除封される。

秋田家のルーツを辿れば、渡島・津軽の安倍氏（安藤・安東）で、若狭小浜の本浄山羽賀寺を庇護し、海運を通じて上方と深く交流していた。実季の姻族細川氏・荒木氏はともに上方をルーツとする。

④ 藩主肥季夫人（濃秀院）は鳥取藩（因州藩）主松平（池田）斉稷の養女、また肥季の妹おセイは肥前大村藩主大村純顕に嫁した。

⑤ 公卿大原重徳（文久の幕政改革の勅使）、公卿・祈祷師土御門晴雄（静寛院宮［和子］の上臈土御門藤子の兄）、公卿冷泉為理と接触した。

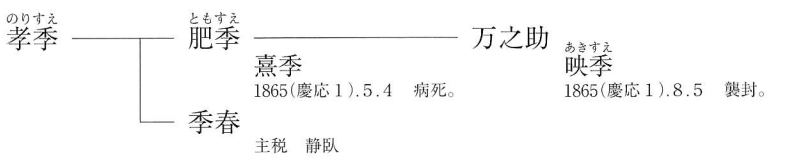
⑥ 平田派国学の浸透 ── 草莽の国学者たちの動き

守山藩領の護衛隊・領内の国学者などの動き。

→高知藩断金隊（隊長美正貫一郎・士民混成の募兵）

◇藩の動き

1863（文久３）年、御所貢献が始まる。貢献組合（伊勢亀山・陸奥中村・越後村上・武蔵岡部・信濃上田・陸奥三春の６藩）。三春藩の在京中の旅宿は車屋町夷川上ル町、三春藩御用達中島芳太郎方であった。この他に円山（丸山）集会



（円山正阿弥、定例は月の２の日、仙台・二本松・三春・新発田・府中・津・徳島・福岡・久留米・柳川・佐賀・熊本などの使臣）や魚惣集会（参加藩名不詳、月の13日）などでの情報交換や議論の場があった。

1864（元治元）年４月、天狗党の乱＝常野戦争で日光山警備を命じられ、藩主肥季自ら出陣し、その年12月に江戸に帰り、翌1865（慶応元）年３月、三春に下向し５月に死去する。

同年８月、嫡子万之助、封を継ぎ、伯父季春後見となる。1867（慶応３）年12月には公卿大原重徳、土御門晴雄、冷泉為理、肥前大村藩御留守居渡邊清（勤王党、後福島県知事）、因幡鳥取藩家老荒尾成章などと接触した。1868（慶応４）年４月６日に京都、政府軍弁事役所より藩士の江戸引揚下の許可を取り、同月10日、江戸開城の日に東征大総督有栖川宮熾仁親王の陣所に伺候する。その一方で、白石会議に参加し奥羽鎮撫府使からの命令で白河に出兵、また解兵届を提出して交戦せずに撤兵し、５月３日には奥羽列藩同盟に参加する。

５月晦日に、貢士奥村権之助、歎願使山地純之祐（学長）、同熊田嘉膳（医師・砲術家＝水戸藩那珂湊の反射炉建造に参加し「大日本史」を授与される。）らが大原重徳（しげとみ）・門脇庄蔵（将曹か・鳥取藩士・国学者・京都詰記録方）らの取次ぎで弁事役所へ出頭し、「御進軍御救助」の歎願書を提出し、６月２日、「不日官軍諸道より進撃救援可有之」との「叡感勅書」を下賜される。６月２日に、５月26日の三春藩隊の行動につき嫌疑を受け、禁足を命じられる。６月24日、棚倉城が政府軍の手に落ち、その前後における行動につき嫌疑を受け同盟軍仙台藩士塩森主税の訊問を受け外事掛不破幾馬が応酬、弁明する。７月15日には秋田主計（非役300石）・河野広胖（郷士）ら棚倉の政府軍（高知藩板垣退助）と接触する。７月26日、三春藩、謝罪歎願書を提出し、藩主は菩提寺へ謹慎し、無血開城する。福島の同盟軍軍事局へ出張中の大関兵吾、二本松出張中の不破関蔵・大山己三郎・渡辺喜右衛門らが同盟軍に殺害される。８月13日に白河口の総督府に呼び出され本領安堵、謹慎御免を申し渡される。

８．下手渡藩、藩主立花種恭（若年寄兼外国奉行、老中格会計総裁）

◆下手渡藩の事情

①　文化の転封と嘉永の所替え ── 表高と実高、あるいは本田高と新田込高 ──

三池領	下手渡領		嘉永以降の下手渡領
三池郡15か村 10,000石	伊達郡10か村 10,0000石 (9,998石余)		伊達郡６か村 6,925石余 三池郡５か村 5,071石余
大牟田	下手渡	601.785	下手渡
片　平	御代田	1,318.311	御代田
馬　籠	小　島	1,514.537	小　島
櫟（いちの）　野	小　神	938.929	小　神
教楽木	羽　田	1,232.283	羽　田
臼　井	西飯野	1,318.7393	西飯野
藤　田	飯　田	358.542	
船　津	牛　坂	186.321	稲　荷
早米来（ぞうめき）	石　田	2,238.069	三池新町
加納開	山野川	2,914.637	今　山
稲（とう）　荷			下　里
今　山			壱　部
（三池）新町			外に込高1,997石余
下（さが）　里			
下二部			

②　所領の分散と経済力の相違あるいは旧領への求心力

1738（元文３）　三池稲荷山から石炭を掘り出す。

1790（寛政２）　石山法度を定める。

1852（嘉永５）　生山坑開坑。1856年採炭に着手する。

1855（安政２）　大浦坑開坑。1857年採炭に着手し、石炭山銀会所を三池新町に設

ける。

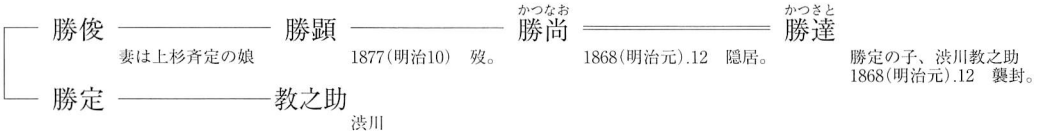
1856(安政３)　藩主立花種恭、幕府に三池石炭10万斤を献上する。

1860(万延元)　石炭山直営のため浜会所を設ける。

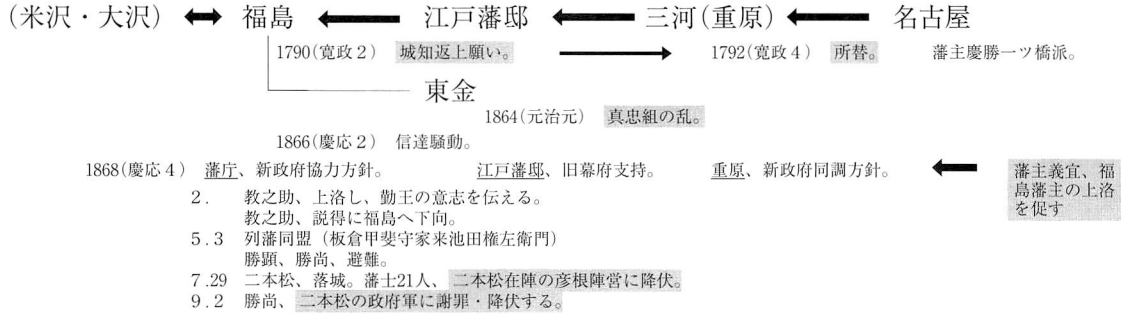
③　思想的政治的環境

下手渡・信達	江　戸	京・大坂	柳川・三池
	1857(安政４)　柳川藩家老立花壱岐親雄、在府中、橋本左内らと交わる。 1864(元治元)　ロッシュと会談。 フランス借款・幕政改革。		
		1865(慶応元).5　将軍家茂に随従上洛。 9　条約勅許談判。	
1866(慶応２)　松沢条八檄文と信達騒動。		京・大坂における柳川藩主立花飛騨守の影響	
	1867(慶応３).11　屋山外記ら参府、藩状訴え。 1868(慶応４).1　京都留守居庵原覚兵衛下向。柳川の意向伝達重臣会議。老中格辞職。		勤　王　攘　夷 真木和泉　三条実美 (久留米藩士)(当時三田尻) ↑↓　↑↓ 【柳　川・三　池】 塚本源吾(郷士) ⇒ 禁門の変・奇兵隊 吉村春明(藩士) ⇒ 江戸・下手渡 森　泰(藩士) ⇒ 江戸・下手渡
1868(慶応４).3　種恭下向。藩政改革方針発表。 3.晦　種恭下手渡出立。	⬅	1868(慶応４).2　下手渡より下向を促す早馬。 3　執政庵原・参政立花の藩主種恭への上洛を促す書状。	
【種恭の情勢判断】－３.27「老中日記」 ○仙台：藩論不統一、奥州探題のような見識。 ○会津・米沢・庄内：進退を共にすべきでない。 ○秋田：方向転換。 ○二本松など南奥諸藩：小藩で力がない。			
	1868(慶応４)閏４　名古屋藩の商船照栄丸で大坂へ。	閏４.20　種恭、参内、謹慎。	
1868(慶応４).5.3　列藩同盟加盟(立花出雲守家来屋山外記)			

9．福島藩、藩主板倉勝尚



① 藩論の混乱と〔名古屋藩 ── 重原陣屋〕の影響



② 福島の混乱

1868(慶応４).4　奥羽鎮撫総督（九條道孝）府　→★←　1868(慶応４).8　列藩同盟軍総督（小笠原長行）府
軍事局を長楽寺に置く　　軍事局を長楽寺に置く。
8　米沢藩兵、福島城下を攻撃。

(Ⅲ) その他の主な奥羽諸藩

1．松前藩、藩主松前崇弘（たかひろ）・徳弘（のりひろ）
1866(慶応２)　松前崇広、病没。徳広、襲封。
1867(慶応３)　新政府に忠誠を誓う。列藩同盟に参加。

2．黒石藩　藩主津軽承叙（つぐみち）
1868(慶応４).5　奥羽列藩同盟に参加。
7　宗藩(弘前藩)の勤皇の方針に従う。

3．仙台藩、藩主伊達慶邦
1868(慶応４).5　奥羽列藩同盟を主導。
9　降伏。
12　領知没収、亀三郎新知28万石。

4．庄内藩、藩主酒井忠篤
1867(慶応３).12　鹿児島藩邸襲撃。
1868(慶応４).5　奥羽列藩同盟に参加。
1868(明治元).9　政府軍に降伏。

5．天童藩、藩主織田信学（のぶみち）・信敏
1868(慶応４).2　信敏、父信学の名代として入洛。
3　奥羽鎮撫使先導となる。
1868(慶応４).4　奥羽鎮撫使副総督沢為量、天童に入る。
閏4.4　庄内藩兵、天童陣屋を焼討ち。
6　吉田大八、自刃する。
9　白河口総督に降伏。
122,000石、減知。

6．米沢藩、藩主上杉斉憲（なりのり）
1867(慶応３).12.30　藩論分裂。
1868(慶応４).3.17　総督府に会津征討の理なきを建白。
5.3　奥羽列藩同盟を主導。
9.2　政府軍に降伏。
1868(明治元).12.7　減知40,000石にて茂憲襲封。

奥羽鎮撫使を擁して旗幟（きし）を鮮明にした天童藩の悲劇は奥羽の小藩にとってまさに他山の石であった。したがって一概に「反盟した」とか「二足の草鞋を履いた」などという批判は二者択一的で短絡的な評価といわざるを得ない。同盟軍各藩の多くは、会津藩の敗北を見越して会津藩降伏以前に政府軍に謝罪

降伏し、重臣の一、二名を犠牲にして藩と藩主の存続の道を選んだ。

Ⅲ．相馬街道（中村街道）沿いを中心とした陸奥国南部の戦局の推移

── 幕領川俣陣屋・下手渡藩天平陣屋・白河藩領保原陣屋・松前氏福山藩領梁川陣屋ほか ──

この項では、『会津戊辰戦史』「新版月舘町域の戊辰戦争年表」(07、『月舘町史』１の稿本、立花種恭「老中日記」、菅野輿（すげのしげる）「奥州二本松藩年表」大河内勝衛「家史」、桃樹園三千俊「戊辰見聞録」などより作成)、『梁川町史』２、『保原町史』１、『霊山町史』１、『伊達町史』１、『福島県の合戦』（いき出版）などによった。一々注記しない。

１月15日、慶喜追討令が発せられる。

１月17日、仙台藩主伊達慶邦へ会津藩主松平容保追討令が発せられる。

１月21日、静寛院宮和子の上臈土御門藤子、橋本大納言実麗、同少将実梁への使者として上洛の途につく。

１月24日、朝廷、仙台・米沢・秋田・盛岡等の藩主に会津城攻撃を命じる。

２月16日、会津松平容保、会津藩邸を発ち下向する。

２月　日、棚倉藩保原分領代官村社喜三郎、陣屋詰農兵100人の編成、郷士・村役人の出稽古を命じる。

３月６日、下手渡藩主立花種恭、江戸深川を出立する。

３月13日、藩主立花種恭、下手渡に到着する。

３月20日、江戸常詰の会津藩婦女子、会津に到着する。

３月21日、藩主種恭、藩政改革に着手する。また、近隣諸藩へ使者を派遣する。

３月23日、奥羽鎮撫使、仙台養賢堂に入り本営とする。

３月25日、在京の執政庵原覚兵衛・参政立花景福より藩主の上京を促す。

仙台藩、会津討伐の軍議を決定する。（土湯・石筵・中山・御霊櫃の各口）

３月26日、会津藩、スネル（弟）から小銃等購入し、スネル（兄）、アメリカ汽船にて河合継之助らと新潟に上陸する。

３月晦日、藩主種恭、家老屋山外記ら69人を従え下手渡陣屋を出立する。

４月朔日、幕領川俣代官所支配地は「真天領」となる。

棚倉藩御用人梅村角兵衛、保原陣屋に入る。

４月２日、保原陣屋に名主を召集し、「尊王の思召し」を伝え奥羽鎮撫総督府・仙台藩の支持を命じる。この日、棚倉藩士触木鎌之助、保原陣屋に入り、数日後（何日か不明）、名主を召集し、年貢や拝借金の完納と才覚金２万両の徴集とを命じた。

４月６日、藩主種恭、江戸海辺大工町の藩邸に到着する。

４月10日、藩主種恭、藩邸前より乗船し、上京の途につく。品川港にて名古屋藩の商船宝照丸に移る。この日、下手渡藩家老屋山外記、江戸より出立し帰領する。

警固のための仙台藩兵60～70人川俣に到着する。

４月11日、江戸開城、福島藩邸の家臣と家族、東金陣屋に避難する。

４月12日、奥羽鎮撫総督、本営を岩沼に移し副総督・下参謀大山ら薩長兵を率いて庄内に向う。川俣代官森孫三郎、伊達・岩城郡司代に、手代遠藤惣八信達取調役元〆となる。この日仙台藩兵福島城下へ入る。

４月13日、鎮撫総督府参謀（世良・大山）、桑折代官黒田節兵衛に対し「会津追討のために仙台藩が入用とする人夫と兵糧の手配、生糸改口生糸・蚕種の冥加の免除等を命じた。仙台藩、白石を本営とする。

４月14日、奥羽鎮撫総督府参謀ら福島城下長楽寺に奥羽軍事局を設置する。

４月16日、仙台・米沢・二本松藩、若松に使者を派遣し松平容保に謝罪降伏を勧告する。

４月18日、東軍、宇都宮城を攻撃する。翌19日に落城する。

４月21日、征討大総督有栖川宮熾仁親王、江戸城に入る。

４月23日、政府軍、宇都宮城を奪還する。

４月27日、徳川家名の相続を田安亀之助に命じる。

閏４月朔日、川俣陣屋、高札を書替える。
① 王政復古、天下御一新。
② 元代官支配地、旧弊を除くの外、此れまで通り郡司代申付け。
③ 蜂起がましきことは禁止。

閏４月５日、大鳥圭介らの東軍、会津領山王峠を越え会津藩兵と田島へ至る。

閏４月10日、宝照丸、兵庫港に入る。

閏４月11日、柳川・下手渡両藩、政府より神戸警固役を免除され会津討手を命じられる。この日、信達の百姓1,500人須川河原に集合し総督軍に戦争反対の嘆願書を提出する。

閏４月12日、奥羽列藩会議開かれる。

閏４月13日、下手渡藩主種恭、大坂の柳川藩邸に到着する。

閏４月18日、下手渡藩主種恭、伏見三宝寺に宿す。

閏４月19日、下手渡藩主種恭、京都清水寺に宿す。
仙台・米沢両藩、解兵届を提出する。
仙台・福島両藩士ら世良修蔵を捕え翌20日殺害する。

閏４月20日、下手渡藩主種恭、政府へ謹慎の請書を差出す。

閏４月23日、福島城下長楽寺の鎮撫府軍事局は白石同盟軍事局に変わる。

閏４月25日、下手渡・柳川両藩主出征催促につき内談する。

５月朔日、東軍、白河城にて政府軍に敗北する。仙台藩士細谷十大夫直英、信達二郡の壮丁を募り衝撃隊と名付け銃を持たず黒装束に一刀を帯び、烏組と呼ばれた。

５月３日、奥羽列藩同盟（25藩）が結成される。

５月４日、下手渡藩主種恭、出陣の家臣へ軍令・武功心得書を渡し門出の神酒を遣わす。

５月６日、越後北部の諸藩が加盟し奥羽越列藩同盟に拡大し公議所を白石に設置する。

５月15日、下手渡藩重臣に藩主の謹慎御免・藩力相応の出兵の御沙汰がある。

５月24日、徳川亀之助に70万石を賜る。

５月25日、下手渡藩主種恭、参内し天皇に拝謁し、御台硯を拝領し乗馬を展覧に入れる。

６月12日、白河近郊の大谷地村の合戦で福島藩兵14人が戦死する。

６月16日、奥羽追討総督府総裁正親町公薫ら、平潟へ上陸する。奥羽鎮撫総督府参謀鷲尾隆聚、白河に入る。

６月18～19日、川俣、針道境に関門を建てる。

６月19日、政府軍（柳川藩兵317人、岡山藩兵302人）、平潟に到着する。
政府軍、順次平潟・小名浜へ上陸する。

６月21日、川俣陣屋、再び榜示杭建替える。「御領所仙台領川俣陣屋支配所」

６月24日、棚倉落城、棚倉藩及び藩主阿部家中ら保原へ逃げてくる。川俣通行につき人足を100～200人と雇うので在方まで人足に出る。

６月28日、棚倉藩阿部正備、前藩主阿部正外、棚倉を脱出し鉾衝村を経て上保原泉福寺・保原陣屋に入る。（７月３日、正外飯坂へ移り、８月15日、正備会津へ移る。）

６月29日、保原陣屋付名主らが陣屋に召集され、人馬の徴発を命じられる。

７月２日、日光輪王寺宮、仙台仙岳寺に入る。

７月11日、棚倉藩、保原陣屋を仮藩庁とする。
藩士賄料兵士１人玄米７合５勺と銭350文、家族玄米５合と銭300文。人馬の徴発連日。

７月12日、福島藩東金陣屋詰菅間開ら６人が小名浜上陸の政府軍鳥取藩兵に所属して新地・駒ヶ嶺の戦闘に従軍参加した。

７月13日、政府軍、磐城平城を攻略する。三池より出陣の下手渡藩兵16人が負傷する。

７月なかば、仙台藩猛虎組、川俣で軍用金を強要し、下手渡・大波村でも金品を掠奪する。

７月17日、仙台・棚倉両藩兵、掛田村三乗院を本営とし、町屋にも駐屯した。

７月26日、三春藩、帰順し、政府軍が三春城に入る。
この日、猛虎隊（隊長荒井良作・軍目付渡辺譲之助）、官軍防御と唱えて川俣鶴屋武右衛門を旅宿にして町内の富家に押入り軍用金と称して押借りをし白石片倉家中橋本稲六郎に糾弾される。

７月27日、朝、三春を発った政府軍（鹿児島藩兵ら）糠沢・上高木村を襲撃・放火する。守山藩降伏する。二本松藩主、重臣を従え脱出する。

７月29日、二本松城落ちる。福島藩主板倉勝尚、家中の老幼とともに米沢街道大沢宿に避難し藩兵もその後を追った。この日、梁川の茶臼山・岩地蔵に台場を築く。福島藩兵内藤豊次郎ら21人、二本松駐屯の彦根藩を介して謝罪降伏を申入れる。米沢藩兵、福島城下へ繰込む。仙台藩衝撃隊（烏天狗組）福島城下馬喰町に放火、町火消しが応戦する。

８月１日、福島藩兵、福島城へ戻る。この日、梁川町、仙台藩士に焼討ちされ、町屋346軒焼失する。

８月２日、仙台・米沢・会津・二本松・棚倉・平・上山の諸藩兵、福島に屯集し、津藩小笠原長行（ながみち）を奥羽軍総裁とし長楽寺に福島軍事局を置く。

８月６日、相馬藩、降伏する。

８月７日、下手渡陣屋の老幼婦女子、本日までに三春へ引き移る。

８月８日、彦根藩兵、川俣へ着陣する。また柳川藩兵、下手渡陣屋へ着陣するもその夜、急遽引揚げる。このころ、剣術家松田内蔵太一門、棚倉藩保原分領の取締りを引受ける。

８月12日、下手渡藩主立花種恭、柳川藩主とともに陸路大坂を出立する。

８月14日、仙台藩兵、５、６人（７、８人とも）御代田村名主を捕縛し山中へ連れ去る。百姓大勢集合し仙台兵１名を殺害する。仙台兵、200人ほど山中に屯集、下手渡藩兵、背後より銃撃、退散させる。夜、仙台藩兵御代田村へ押し寄せ放火、16軒焼失する。この日より掛田戦争。

1869（明治２）年８月届けの掛田村の被害額＝焼失寺１、町屋９。罹災者38人、打毀し６棟、家財道具・金品の被害5,695両と銭300貫文。

８月15日、夜、下手渡・小島村へ押し寄せ民家・寺院・下手渡藩陣屋を焼き払う。

下手渡藩仮庁舎を小島村興隆寺に設ける。

８月16日、この日、下手渡陣屋内の柳川藩兵７、８人、藩兵ともに27人、農兵300余人が詰める。仙台藩兵、300人ほど下手渡・小島に押し寄せ、下手渡陣屋を襲撃し、陣屋下、町方、領分在々へ放火、掠奪。陣屋の積米600俵余りが奪われる。陣屋も焼き払われる。家中の老幼を携え三春城下の庚申坂に逃れる。掛田ではこれ以後も断続的に戦争が続く。

８月17日、相馬領玉野・草野村、伊達郡玉野村を仙台藩兵焼打ちする。新田村名主らを中心とする50人ほどの農民兵が参加する。

柳川藩兵、下手渡へ繰り込み、月舘の仙台兵士200人ほどを攻撃する。

この日、二本柳戦争。仙台・米沢の東軍敗走する。

８月19日、旧幕府海軍副総裁榎本武揚ら軍艦８隻を率いて品川湾を脱出する。

８月20日、川俣陣屋付村々の百姓、徒党を組み春日宮・神宮寺に参集し、打毀しに及ぶ。この日、政府軍（萩・高知・大村・大垣）会津攻撃のため二本松を出発する。

８月21日、藩主立花種恭、四日市に泊し、柳川隊より戦況を聴取し、勇戦の藩兵に感状を贈る。

８月22日、徳島藩兵、三春を出立する。この日、藩主種恭、名古屋藩船にて出立する。

８月23日、藩主立花種恭、宮宿に泊る。以降陸路。

８月23日、仙台兵、小島村中島の杢兵衛方へ押入り、金銭掠奪、放火に及び、６、７軒を焼失する。徳島藩兵250人、川俣へ繰込み、上小国村へ宿陣の棚倉藩兵60人ほどを追払う。掛田合戦で三乗院少々焼ける。仙台兵などの東軍650人ばかり。内生捕り３人、討取り40人余。政府軍の討死関口丹蔵・田浦久兵衛・松沢村猟師小平次・長三郎・秋山村猟師富之助。負傷田辺七兵衛・小川惣左衛門。徳島藩兵、川俣へ帰陣する。

８月24日、仙台兵24、25人、小島村へ放火。徳島藩兵と合戦。焼失７軒。この日、目明し勇之進・喜吉召捕られる。

８月25日、徳島藩兵、東軍を追撃して掛田口にて東軍兵600人余と砲火を交え、川俣へ引揚げる。徳島藩親衛隊に動員された百姓

８人戦死する。

８月29日、「磐城平民政裁判所達し」の高札を懸け替える。

① 岩城平へ民政裁判出張所を設置する。民政・市井は旧主・元代官・取締のままとする。

② 無税あるいは半納のため９月10日までに詳細取調べ上申すること。

③ 市井も同様取り調べること。

④ 兵夫・助郷人足を取調べること。

⑤ 市・郷割付帳・皆済目録、３ヵ年以前まで差出すこと。

⑥ 人別竈帳を差出すこと。

９月朔日、政府軍50、60人、川俣へ繰込む。

９月２日、京都から下向した渋川教之助の説得で福島藩主勝尚、二本松在陣の彦根藩陣所にて謝罪降伏する。前藩主勝顕、福島城下常光寺に入り謹慎し、福島城は奥羽追討軍大村藩渡辺清左衛門に引渡され、藩庁は郡代名倉治部助屋敷に移される。

９月４日、米沢藩、降伏する。この日、丹羽長国、家老らとともに米沢を出立する。

９月９日、藩主立花種恭、江戸柳川藩邸奥向きに同居し、到着の屋山外記・荒木又之丞より戦況の詳報を聴取する。この日、棚倉藩、藩士遠藤駒吉を代理として降参の書を川俣検断伝内宅にて提出する。

９月11日、棚倉藩遠藤駒吉、降伏が許され政府軍兵士が付き添い、三春在陣の太政官へ出頭する。

９月12日、藩主種恭、柳川同道にて登城し弁事に拝謁し三条実美・有栖川宮に対面する。

９月13日、仙台藩、降伏する（９月15日とも［松藩年表］）。この日、下手渡藩士大河内忠良、藩主の命により下手渡へ向け江戸を出立する。また遠藤駒吉、三春より川俣へ帰る。また、掛田・小国・月舘辺の悪党退散し梁川・保原辺の通行が出来るようになる。

９月14日、政府軍、若松城総攻撃を開始する。

９月15日、藩主種恭、竜虎隊長佐竹勇雄より隊員200人の下手渡藩附属申し入れを拒否する。

９月16日、藩主種恭、会津藩が手代木・秋月・小森らを降伏の使者とすることを耳に入れる。

９月17日、下手渡藩士大河内忠良、三春に到着する。（「見聞録」の著者）二本松落城の跡を見物、「言語同断めもあてられぬ有様に候。（中略）御殿の跡を見物いたし候処庭のかかり手を尽して築山鎗水（ママ）泉水に至るまで彼の宗意が銀閣の景をうつすといひけん何某公の庭と異ならず（中略）。是皆民の脂をしぼりてみがき立てたる宮殿楼閣いかんぞ長く異翫（ママ）」スベキ、一日の篭城いたすべき力もなく僅に一時の戦争に灰燼と成りたる事、実に天公の裁断によるべきか。

９月18日、棚倉藩主阿部正静、上保原村泉福寺に入る。

９月20日、藩主種恭、長岡藩主牧野左京亮より天皇の京都出立と会津藩主松平容保父子の降伏につき告げられる。この日、二本松藩主丹羽長国、二本松・大隣寺に入り謹慎する。この日、藩主種恭、青木平九郎仕官の件につき織田市蔵方へ藩士吉村土肥之助を出頭させる。

９月22日、会津藩降伏し、藩主松平容保、妙国寺に入り謹慎する（「見聞録」は９月21日とする）。

９月23日、棚倉藩元藩主正備、二本松の征討軍陣所に嘆願書を提出する。

９月24日、平民政局川俣出張所から16歳から59歳までの男子数・牛馬数の調査の廻状が出される。

９月26日、各村の検断・名主が廻状の件につき年番会所へ集合した。これに応じて保原年番所では村高・家数・男女別人数を書上げさせる。

９月26日、正備、保原へ戻る。

９月27日、征討軍総督、二本松を出立、仙台へ発向する。

９月29日、二本松の制札書替え８面のうち１枚

「丹羽左京儀、朝敵たるにより追討仰付けらる。ついては農工商の三民の儀はいささかかまえこれなく候。早々帰住いたし、なるたけ生業相営むべき事。

辰８月　　参謀・軍監」

この日、藩主種恭、長岡藩邸にて内談する。

10月１日、若松民政局を設置する。この日、二本松滞陣の政府軍、仙台征伐に進発する。また下手渡藩士大河内忠良、三春より家族を連れて下手渡に帰る。

10月３日、大河内忠良、小神村の斎藤清十郎方に居住する。

10月４日、仙台藩降伏する。

10月10日、藩邸に長岡藩主牧野左京亮来訪し酒宴を催す。下手渡にて防戦の藩兵に感状と胴皮帯留類を授与する。

10月12日、藩士平塚庄三郎・森山邦衛、磐城民政局より福島旧領、当分民政筋取締りを命じられる。

10月13日、天皇江戸城へ到着。藩主種恭、鎧直衣にて奉迎する。この日、棚倉藩主正静と元藩主正備が東京へ出立した。

10月14日、藩主種恭、天機伺いとして弁事に拝謁する。

10月15日、川俣陣屋付村々、民政局より当分の間、取締りと年貢上納を命じられる。

川俣の町検断が草野村まで相馬藩をお迎えに出るも相馬藩は一旦辞退する。藩主種恭、召されて宮中へ参内し、拝謁し杯を賜る。

10月20日、征討総督・参謀ら二本松を出立し江戸へ登る。

10月23日、藩主種恭、召されて参内し天杯を頂戴する。

10月25日、奥州出征中の藩兵帰還し種恭に面会し祝い酒を賜る。

10月26日、上山藩主松平山城守信庸、降参し川俣経由で江戸に登る。

10月28日、下手渡藩、藩治職制により執政・参政・公議人・家知事を置く。

10月29日、下手渡藩兵、奥州より帰還につき藩主種恭、形成を聴取する。

10月30日、藩主種恭、参内する。２月以来、動員された担夫・触夫（川俣203人、山木屋61人、泉原515人［泉原は政府軍と東軍］）

11月朔日、藩士内山田権大夫・森山雄之進・山村又蔵、江戸藩邸に到着するにより藩主種恭、その後の形勢を聴取する。また奥羽総督府の九條・沢・醍醐の三卿、江戸へ登る。

11月２日、青木平九郎改め林範平を召し抱え、10石４人扶持を与える。

11月３日、川俣陣屋付村々の民政取締り再度仰せ付けられ相馬家中、隊長太田清左衛門・郡奉行伊藤軍左衛門・太田俊助・志賀恒吾・御勘定役錦織寿助・和田清五郎・菅野竜助ら川俣へ着陣する。

11月９日、三池より奥州出陣の兵士、帰還するにつき藩主種恭、面会慰労する。

11月10日、下手渡藩主種恭、家老屋山外記の帰領につき、10月10日つきの感状を託す。

11月12日、徳川（田安）亀之助、初めて参内する。

11月15日、下手渡藩士大河内忠良、郷方調役・兵隊仕立方・軍事方となり、小島村斎藤卯平次方に移る。

11月18日、徳川亀之助、従三位中将に任じられる。この日、藩主種恭に柳川藩立花少将に附属し帰領の御沙汰が出る。

11月19日、柳川藩主立花家より三池への所替えの願書を差出す。（11月23日願の趣却下）。下手渡藩立花家より御一新後の都合につき上申書を差出す。（11月25日、願の趣裁可）。

11月晦日、藩主種恭、三池へ出立につき参内する。

12月２日、藩主種恭、柳川藩主一同にて江戸藩邸を出立する。

12月７日、棚倉藩、城地没収・謹慎・隠居を命じられる。

12月12日、棚倉藩主阿部正静隠居、阿部正功６万石を襲封する。

12月26日、二本松藩は丹羽長裕（上杉頼丸）５万石となる。

奥羽諸藩、わけても陸奥南部の各藩の動向は藩論が分裂し、あるいは紆余曲折し、あるいは情勢の推移とともに流動的に変遷した。そして結果的には藩主とその家族で犠牲になったものは１人もいなかった。重臣の１、２名がその一身に責めを引き受けて命を絶った。幕臣・藩士たちの中には、断金隊・親衛隊・猛虎隊・衝撃隊（烏天狗組）など独自に徒党を組んで戦場を駆け巡ったものたちもあり、在野の

剣術家たちが戦闘に参加するなど戦場は混乱した。同盟軍も政府軍もそれぞれに金銭や食糧その他の物資をあるいは徴発しあるいは掠奪し、あるいは家屋を打毀しあるいは焼き払った。拉致された村役人を奪還すべく同盟軍と戦った百姓たちもあった。同盟軍の放火に応戦した町火消もあった。しかし次章で取り上げるように百姓たちは物成や伝馬人足の過重な賦課に喘ぎ、掠奪や焼打ちにおののき、田畑や作物は踏みにじられひたすら戦争の停止を願った。

Ⅳ. 百姓の戦（いくさ）

── 交通量と助郷役の急増 ──

ここでは、戊辰戦争の展開と同時進行した干戈（かんか）や銃砲を交えない百姓たちの戦いを取り上げることにする。

伝馬人足については、丸井佳壽子氏の助郷騒動に関する長年にわたる研究業績と、かつて高柳真三氏が『日本歴史』に紹介した「慶応戊辰卯月日記」（下糠田村検断菅野新左衛門）などをベースにしてまとめた。

(I) 宿場の人馬の常備と助郷制

江戸幕府は江戸日本橋を起点とする幹線五街道と主要脇街道を諸大名に命じて普請（工事）させ、旅籠と問屋場を備えた宿場を建設し、大名・旗本の参勤・公役・所替、あるいは通信や物資の輸送などの便をはかった。やがて需用の拡大に伴い往還の武士や軽い旅人に至るまで利用範囲が広げられた。宿場の常備の人馬＝夫馬を定めた。この常備の夫馬（役歩役馬）で捌ききれないときには予め指定された定助郷から動員する。さらに代役として指定された助郷（指村・差村）からも動員する。助郷には定助郷の他に追加供給する加助郷、臨時に供給する大助郷などがあった。交通量、物産の輸送量の増加に伴い助郷の負担が重くなる。夫馬の割当は村高から割り出した軒前をもとにしていたから没落して休み高など生じるとその分まで降りかかってくる。それに宿場の夫馬の需用は農業の閑繁に関係なく動員される。宿場より遠隔の助郷などは宿場までの往還の負担も大きい。こうして助郷の負担軽減を求める運動が元禄期ごろから始まった。

とくに戊辰戦争の時は本街道の混雑や戦火の危険を避けて脇街道＝相馬街道の利用が急増した。

検断日記などから抄出した1868（慶応４）年４月の下糠田（月舘）の人馬継立ては次のようであった。

月日	旅行人・荷物	人馬の継立て
4.11	仙台様50人	村役人が案内を勤める人足出す
	立花家中	継立て（人足不明）
	高島氏	川俣から早駕籠
4.12	立花家中	駕籠二丁、３組７人
4.13	多田銃三郎様	手渡へ１組３人
4.14	立花家中	石田へ人足11人
	岩城家中９人	泊り
4.15	岩城家中９人	下糠田より手渡へ人足４組各１人ずつ４人
	森孫三郎様	下糠田にて休み、人足２組４人
	田中勘左衛門	先触１人、人足10人
4.16	塩物２駄	下糠田より大久保へ２疋
4.17	立花家中	石田より手渡へ（人足不明）
	棚倉藩元〆田中安五郎	下糠田より手渡へ人足３人
	仙台藩６人	夜中早駕籠、下糠田より手渡へ
4.21	桑折郡司代調役横田於兎二郎様	先触１人、馬３疋、人足５人
	駕籠１丁両掛１荷	
	水戸様家中江戸登り	下糠田より手渡へ人足２人、馬２疋
	松前様家中３人江戸登り	下糠田より手渡へ馬３疋
	早朝、天狗組（人数不明）	下糠田より手渡へ貸馬２疋、宵に石田へ馬２疋
	仙台様家中	相馬へ馬２疋
4.22	夜８つ時、仙台様家中	早朝、白石より早馬、下糠田より手渡へ人足２人
4.26	仙台様家中大槻周次	下糠田より下小国へ早駕籠１丁人足６人
	桑折郡司代様	下糠田より川俣へ駕籠１丁両掛２荷人足６人
	桑折郡司代調方役元	先触特使１人馬１疋

(II) 百姓の負担軽減交渉

そして1700（元禄13）年、1725（享保10）年 ── 江戸訴訟 ──、1761（宝暦11）年、1763（同13）年、1765（明和２）年、1767（同４）年、1770（同７）年、1775（安永４）年、1776（同５）年 ── 江戸訴訟 ── と、幕領代官による約定破棄命令 → 歎願訴訟 → 新約定が繰返された。

紙数の都合上、各期の交渉内容を逐一掲出することをせず1868（慶応４）年の交渉・妥結の内容のみ箇条書にする。

４月以降、検断・組頭・軒頭・惣代・年番などが、保原年番会所や下保原の小槌屋、あるいは福島や瀬上宿の検断・名主・福島藩庁などを頻繁に往還・宿泊し、時には軍事局に召喚され時には福島藩の代官と談判するなど昼夜の別なく交渉に当り、５月29日に至ってようやく妥結した。交渉経過と妥結の要点はおよそ次のようであった。

① 阿部氏棚倉藩分領の村が助郷免除の歎願書を保原陣屋に提出した。

② 奥州道中瀬ノ上宿から棚倉藩分領の加助郷年期明け村７か村（上保原・下保原・仁井田・柳田・所沢・中村・下糠田）に加助人馬の要請があった。

③ 上記加助人馬の要請について瀬ノ上宿の役人と談判し、保原陣屋に歎願書を提出した。

④ 奥羽鎮撫府から棚倉藩分領の５か村（下糠田・中村・上保原・下保原・所沢）、松前藩分領の６か村（梁川・大門・泉沢・金原田・大久保・西五十沢）、土井氏刈谷半分領の３か村（大立目・塚原・冨沢）の合計14か村に対し当分の間、奥羽鎮撫府御用人馬を福島宿に差出すようにと命じられた。

⑤ 棚倉藩分領５か村で歎願書を作成し下手渡宿と協議して５か村の内、下保原・中村・下糠田の３か村は通行量が多いので２分として歎願書を修正し、松前藩分領は４分５厘に決定した。

⑥ だが、松前藩分領の梁川・下手渡藩領下手渡も武家の通行量が多いので、全て２分に再修正し下保原・中村・下糠田の３か村は官軍通行に限って加助郷役を勤めるように交渉し、約諾を取付け歎願書を修正する。

⑦ 中村の組頭義助が福島宿４分５厘としても下保原・中村・下糠田３か村は政府軍の通行だけ２分５厘とし上保原・所沢の２か村は２分としその他はこれまで通りではと提案し在方の村に反対された。

⑧ なかなか妥結しないので、鎮撫府から福島宿の政府軍通行の助郷を先決するようにと内命を受けた。

⑨ 歎願書を提示したところ福島宿方が受理しないので、福島宿方の案文を協議の結果を踏まえて加筆して提出した。

⑩ その結果、最終的には、次のように決定した。

下保原・中村・下糠田の３か村は加助郷を２分５厘＝25％負担する。

上保原・所沢の２か村は加助郷を２分＝20％負担する。

福島は４分５厘＝45％負担する。

その他の村々はこれまでと同じく負担する。

脇街道筋の人馬の動員が増加するのに加えて本街道筋の人馬の動員も増加し助郷の人馬動員も増加する。その上戦時下では、あるいは担夫や軍夫・農兵として召集され、あるいは砲火・銃弾のもとに曝され、あるいは掠奪・拉致・殺戮を欲しいままにされた民百姓にとって「武士の大義」よりも「明日の生活」をどうするか、負担をどのように軽減するかが大事であった。

Ⅴ．おわりに　――結びに代えて――

信達を中心とした戊辰戦争の経過を各藩の事情・去就・戦局の推移、助郷騒動の２つの角度から大雑把に観察した。各藩の財政と軍備に関する僅かな資料から、２、３の事例を紹介して結びに代える。

1870（明治３）年12月に、府中藩が政府に提出した藩債は、金１万6,322両と銀５匁６分４厘、償還計画は２万6,082両を25年賦で債権者は93口であった（『石岡市史』中巻収載「石岡藩公文録」）。また二本松藩が1865（慶応元）年に、京都警衛のための借上金は６万5,300両であった（『奥州二本松藩年表』所引、『本宮市史』２，p.709）。

府中藩の府中陣屋には、1868（慶応４）年５月時点で、ミニイール銃27挺、ゲベル銃58挺、和銃35挺、旋条砲２挺、ボウト１挺が備えられていた（『長沼町史』１，p.575）。同年閏４月29日に二本松城下に宿営した福島藩池田隊員100人の装備は、槍（士50人）、鉄砲（士20人、足軽30人）、内和銃45挺、洋銃５挺であった（『本宮町史資料双書』２，戊辰戦争年表）。いかにも劣弱な装備であった。

ところで蛇足ながら戦法をみると、二本松藩領の安積郡（現郡山市）内の各村が連日会津藩兵によって放火・焼討ちされ、二本松藩領安達郡糠沢村（現本宮市）では政府軍によって焼討ちされ、相馬街道筋では仙台藩兵によって焼討ちが繰り返され多くの犠牲者を出している。